

David Österle: „Freunde sind wir ja eigentlich nicht“. Hofmannsthal, Schnitzler und das Junge Wien Wien: Kremayr & Scheriau, 2019

戸 嶋 匠

フーゴ・フォン・ホーフマンスタール、アルトゥーア・シュニッツラー、フェーリクス・ザルテン、リヒャルト・ベア＝ホフマン、ヘルマン・パールの五人の文学者の伝記。著者のダーフィット・エステレは、「伝記の理論と歴史のためのルートヴィヒ・ボルツマン・インスティトゥート」の所長代理を務める研究者である。

本書は七章に分かれている。彼らが一時期集ったカフェ・グリーンシュタイドルを巡る第一章、「ウィーン自由劇場」とメーテルランク劇上演についての第三章、キーワードとしての「神経」と「気分」、世紀転換期のウィーンの街の歴史主義が彼らの作品に与えた影響をまとめた第四章、政治的リベラリズムの終焉と文化的モデルネの誕生の同時性、『恋愛三昧』上演の経緯、カール・クラウスによる彼らとその文学の「皮相性」や「ポーズと衣装の愛好」への批判などを取り上げる第五章、各人の休暇の過ごし方やホーフマンスタールの劇作家としての発展を描く第六章、そして、メンバーがそれぞれ家庭を持ちウィーンの都市部から離れてゆくことによる「若きウィーン」の自然的解散と、その後の彼らの関係性を語る第七章である。

巨大な新ブルク劇場では、旧ブルク劇場とは違って、役者たちが適度な声量で交わす会話は、舞台から離れた観客には聴き取りづらい。舞台の上の役者仲間ではなく観客に向かって台詞を叫ばなくてはならないのである。そのためホーフマンスタールは、『むずかしい男』のような例外を除き、「孤独な主人公たち」の独白という形式に重きを置いたのだ(166頁)との説を著者は唱える。こうした啓発的な箇所もある後半だが、上記の内容を見てもわかるように、全体としては文学史の定説に沿った手堅いまとめという印象である。むしろ興味深いのは、前半の、彼らの人間関係についての第二章『「友達？ 我々は本当は友達ではありません」』だ。本のタイトルにもなっているこの章題は、ザルテンの回想にあるベア＝ホフマンの言葉からの引用である。これに「我々はただ互いの神経に障らないに過ぎないのです」(58頁)と続く。ホーフマンスタールとシュニッツラーの作品のみが一般読者に格別読み継がれている後世からすると意外にも、ベア＝ホフマンは、彼らのうちで人間的・芸術的に最も優れた人物として、周囲から一目置かれていたという。それは、あのホーフマンスタールをして「私のあなたに対する友情なんて、あなたの私に対する友情ほどの価値はありません。遥かにちっぽけな価値しかありません」(65頁)という阿諛追従の手紙を書かせるほどであった。その一方でシュニッツラーは、ホーフマンスタールが自分よりベア＝ホフマンと親密にしているのは不愉快だと、日記に記している。また、批評家ルドルフ・ロターールがグループの中ではベア＝ホフマンに最も

文学的才能があると見なしている、と聞き知ったときも、彼は日記にこう書いた。人々がホーフマンスタールを「最も優れている」と見なすことはわかっている、だが「それ以外の者を私の上位に置くのは腹が立つ」(59頁)。そのシュニッツラーと『バンビ』の作者ザルテンは最初仲が良かったが、ザルテンの虚言癖がシュニッツラーを苛立たせるようになる(66頁)。ホーフマンスタールは、ザルテンに個人的な女性への関心を「芸術理論」と取り違えないようにと手紙で忠告した(67頁)が、ザルテンはホーフマンスタールの貴族的・軍人的気取りを鼻持ちならぬと感じていた(69頁)。ヘルマン・パールは「若きウィーン」の芸術上のメンターと見なされてきたが、彼の功があったのはむしろ人脈作りだと著者はいう(69頁)。シュニッツラーは、パールを「いつも人の関心を引き、いつも才気に溢れ、いつも風変わりでいたいがために」一般的意見に反対するに過ぎないと非難する(72頁)。パールはホーフマンスタールを持ち上げる批評を何度も書いたが、書かれた当人は後年、パールの自分への批評は党派的で、真実味も一貫性もなく、「全く嬉しくなかった」と告白している(71頁)。

「若きウィーン」といえば、神童ロリスことホーフマンスタールを、グループの中心人物(とされてきた)ヘルマン・パールが手放しで称賛したエピソードが何より先に念頭に浮かぶ。そのため評者は、他のメンバーの相互関係については詳しく知らぬまま、よくいえば親密な、悪くいえば互いに対する批判的なまなざしを欠くグループという先入観を抱いていた。本書を読みそのようなイメージは改めざるを得なかった。洗練された都会人の彼らは、「友達」同士ゆえの無粋な熱い喧嘩などしない。そのかわり「神経」の人である彼らは、互いへの不平不満を絶えず募らせ、裏でしっかり書き残していた。それにもかかわらず、あるいはむしろ、カリスマ的支配もなく相互に適度な距離を置いていたからこそ、舞台上演などでのよい協力関係を築くことができたのかもしれない。